11名人伝（中島 敦）

―弓矢の師、から学び始めたの上達は驚くほど、速かった。……

Ⅰ　奥儀伝授が始まってから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百発［　Ⅰ　］である。二十日の後、いっぱいに水をえたをの上に載せてを引くに、狙いに狂いの無いのはもとより、杯中の水も微動だにしない。の後、百本の矢をもって速射を試みたところ、第一が的にれば、続いて飛び来たった①第二矢は誤たず第一矢に中って突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢が第二矢の括にガッシとい込む。相属し、相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の括に喰い入るが故に、絶えて地にちることがない。瞬く中に、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその最後の括はなお弦をむがごとくに見える。で見ていた師の飛衛も思わず「善し！」と言った。

―の後、紀昌の矢の速度と狙いの精妙さは、三本を射切っても相手に気付かれない域にまで、達した。……

Ⅱ　もはや師から学び取るべき何ものも無くなった紀昌は、ある日、ふと②良からぬ考えを起こした。

　彼がその時独りつくづくと考えるには、今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛をおいて外に無い。天下第一の名人となるためには、どうあっても飛衛を除かねばならぬと。かにその機会をっている中に、一日たまたまにおいて、向こうからただ一人歩み来る飛衛にった。とっさに意を決した紀昌が矢を取って狙いをつければ、その気配を察して飛衛もまた弓を執って相応ずる。二人互いに射れば、矢はその度に中道にして相当たり、共に地にちた。地に落ちた矢がをも揚げなかったのは、両人の技がいずれもにっていたからであろう。さて、飛衛の矢が尽きた時、紀昌のほうはなお一矢を余していた。得たりと勢込んで紀昌がその矢を放てば、飛衛はとっさに、傍なる野茨の枝を折り取り、そのの先端をもってハッシと鏃をき落とした。ついに非望の遂げられないことを悟った紀昌の心に、③成功したならば決して生じなかったに違いない④道義的の念が、この時として湧き起こった。飛衛のほうでは、また、危機を脱し得たと⑤己がについての満足とが、敵に対する憎しみをすっかり忘れさせた。二人は互いにけ寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。

＊語注

＊括…。弓の弦をかませる部分。

＊鏃…矢の先端の、射当てたときに刺さる部分。

問１　［　］Ⅰに入る漢字二字を答えよ。

〔　　　　　〕

問２　―線部①について、下の第一矢の図中に、突き刺さった「第二矢」を書き加えよ。（図省略）

問３　―線部②は、どのような考えか。文中から一〇字で抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　 　〕

問４　―線部③について、その理由として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　師となり、弟子がいれば、いらぬ考えなど出てこないから。

イ　天下一の名人となれば、狙われて、ゆとりがなくなるから。

ウ　得たものを守るために、全ての雑念を忘れようとするから。

エ　己の力にうぬぼれ、自らを省みることなどなかったろうから。

オ　飛衛がいなければ、師に対するどのような思いも無意味だから。

問５　―線部④は何に対する「慚愧の念」か。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　卑怯にも、矢が尽きてしまった師に射掛けてしまったこと。

イ　師を亡きものにして、天下第一の名人になろうとしたこと。

ウ　声もかけずにいきなり矢を取って師に矢を射掛けたこと。

エ　先ほどまで敵だった師と仲直りをし、野原で抱き合ったこと。

オ　師の力に及ばないのに、うぬぼれて高慢な態度をとったこと。

問６　―線部⑤について、飛衛はどのような「伎倆」に「満足」したのか。五〇字以内で具体的に述べよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　〕

【解答】

問１　百中

問２（図省略）

問３　飛衛を除かねばならぬ

問４　エ

問５　イ

問６（例）紀昌の最後の一矢を、とっさに野茨の枝を折り取って、棘の先端をもって鏃を叩き落とすことができた伎倆。（49字）

ポイント

問１　百発百中＝放つごとにすべて命中する。